

## 農山村における住民生活の構造と 福祉的課題とに関する一考察

高木健志

### 〔抄録〕

農山村と聞くと、しばしば集落が消滅するとか、高齢者の介護問題とか、交通が不便であることから不利な条件にある、といった見方がなされることがある。一方で、農山村の住民は温かく、きずなも強い、ということも言われたりする。

本稿では、筆者のフィールドの一つである熊本県山鹿市のデータを取り上げながら、農山村の住民の生活の構造を明らかにし、そのうえで、福祉的課題を検討していくことを目的とした。

その結果、田畑や山林の面積が大きく占めており、地理的には「農山村」といえるが、従事する産業という観点から住民の生活の構造を見た場合には「住民生活の都市化」がうかがえた。

また、なかでも、コロナ禍という想像もしていなかった状況の変化が、農山村の住民生活、なかでも福祉的課題にどう影響していくのか、多くの課題が見当たった。

キーワード：農山村、生活の構造、現代農山村における「住民の生活様式の都市化」、福祉的支援、農村ソーシャルワーク

### はじめに

農山村と聞くと、集落が消滅するとか、高齢者の介護問題とか、交通が不便であることから不利な条件にある、といった見方がなされることがある。一方で、農山村の住民は温かく、きずなも強い、ということも言われたりする。

本当はどうなのだろうか。

実は、農山村の生活の構造はあまり知られてはいないのではないだろうか。

そこで、本稿では、筆者のフィールドの一つである熊本県山鹿市のデータを取り上げながら、農山村の住民の生活の構造を明らかにし、そのうえで、福祉的課題を検討していくことを目的とした。

## 1. 農山村における生活の構造

藤松は、コミュニティについて「一定の地域性において、それを構成する要員の社会的相互作用を介して共同生活が充足され、こうした経験を通じて帰属意識やある種の仲間意識である精神的な絆が結ばれている集団」としている<sup>(1)</sup>。現代農山村は、どのような状況にあるのであろうか。その状況をつかんでいくために、統計的データからみていくこととする。

本稿では、筆者のフィールドである熊本県山鹿市を取り上げていく。最初にことわっておくが、筆者はこの熊本県山鹿市が大好きだ。そのうえで、生活の構造や課題を検討していきたい。

さて、「令和元年度山鹿市統計資料」<sup>(2)</sup>によると、山鹿市の面積は、29,969haである（表1）。熊本県山鹿市の人口は、53,404人で、男性25,171人、女性28,233人である（表2）。年齢別では、65歳以上が多い（表3）。

さて、では、山鹿市の産業等を見ていこう。

山鹿市の全産業の従事者数は、18,308人である。

表1 山鹿市の総面積及び地目別土地面積 単位：ha

	総面積	田	畑	宅地	池沼	山林	原野	雑種地	その他
平成28年	29,969	4,328	3,814	1,577	5	9,808	169	655	9,613
平成29年	29,969	4,321	3,801	1,584	5	9,792	168	668	9,630
平成30年	29,969	4,303	3,758	1,587	5	9,792	168	699	9,657
平成31年	29,969	4,289	3,730	1,593	5	9,794	168	725	9,665

※各年1月1日現在。

税務課「固定資産概要調書」

出典：熊本県山鹿市（2020：5）をもとに筆者引用

表2 地区別住民基本台帳人口、世帯数、1世帯あたり人員、面積及び人口密度

単位：人・世帯・km<sup>2</sup>・人/km<sup>2</sup>

		山鹿市	山鹿地区	鹿北地区	菊鹿地区	鹿本地区	鹿央地区	
平成29年 3月31日	人口	計	53,404	30,355	4,078	6,255	8,158	4,558
		男	25,171	14,223	1,967	2,928	3,876	2,177
		女	28,233	16,132	2,111	3,327	4,282	2,381
	世帯数	21,692	13,005	1,511	2,302	3,240	1,634	
	1世帯あたり人員	2.46	2.33	2.70	2.72	2.52	2.79	
	面積	299.69	-	-	-	-	-	
	人口密度	178	-	-	-	-	-	

出典：熊本県山鹿市（2020：8）をもとに筆者引用

表3 年齢(5歳階級)・男女別人口(再掲) 単位: ha

		年 齢 区 分 ( 再 掲 )					年 齢 区 分 割 合 (%) ※				
		0 ~ 14	15 ~ 64	65 ~	75 ~	85 ~	0 ~ 14	15 ~ 64	65 ~	75 ~	85 ~
山鹿市	総数	6,332	27,848	18,054	10,239	3,820	12.1	53.3	34.6	19.6	7.3
	男	3,257	13,726	7,497	3,817	1,181	13.3	56.1	30.6	15.6	4.8
	女	3,075	14,122	10,557	6,422	2,639	11.1	50.9	38.0	23.1	9.5
山鹿地区	総数	3,873	16,328	9,789	5,282	1,884	12.9	54.4	32.6	17.6	6.3
	男	1,972	8,005	4,043	1,972	588	14.1	57.1	28.8	14.1	4.2
	女	1,901	8,323	5,746	3,310	1,296	11.9	52.1	36.0	20.7	8.1
鹿北地区	総数	342	1,985	1,623	986	379	8.7	50.3	41.1	25.0	9.6
	男	188	1,038	679	371	122	9.9	54.5	35.6	19.5	6.4
	女	154	947	944	615	257	7.5	46.3	46.2	30.1	12.6
菊鹿地区	総数	590	3,009	2,404	1,528	578	9.8	50.1	40.0	25.5	9.6
	男	298	1,489	1,019	587	186	10.6	53.1	36.3	20.9	6.6
	女	292	1,520	1,385	941	392	9.1	47.5	43.3	29.4	12.3
鹿本地区	総数	1,049	4,246	2,571	1,476	599	13.3	54.0	32.7	18.8	7.6
	男	562	2,061	1,046	521	173	15.3	56.2	28.5	14.2	4.7
	女	487	2,185	1,525	955	426	11.6	52.1	36.3	22.8	10.2
鹿央地区	総数	478	2,280	1,667	967	380	10.8	51.5	37.7	21.9	8.6
	男	237	1,133	710	366	112	11.4	54.5	34.1	17.6	5.4
	女	241	1,147	957	601	268	10.3	48.9	40.8	25.6	11.4

平成27年国勢調査

※は不詳を除いて算出。

出典：熊本県山鹿市(2020:21)をもとに筆者引用

表4 産業(大分類)・男女別15歳以上就業者 単位: 人

総 数	総数	25,569
	男	13,397
	女	12,172
第一次産業	計	4,219
	男	2,461
	女	1,758
第二次産業	計	6,628
	男	4,450
	女	2,178
第三次産業	計	14,621
	男	6,426
	女	8,195

平成27年国勢調査

出典：熊本県山鹿市(2020:26)をもとに筆者引用改変

これを、「農林漁業」と「非農林漁業」とに大別すると、農林漁業従事者数は385人、非農林漁業従事者数は17,923人である。

田畑や山林の面積が大きく占めており、地理的には「農山村」といえるが、住民の生活の構造を従事する産業という観点から見た場合には「住民生活の都市化」がうかがえる。

次に、現代農山村の風景である。おそらく、ひろく農山村のイメージは、「ひと」と「どうぶつ」とが共存し、いわば持ちつもたれつ、といったイメージであったのではないだろうか。ところが、現代農山村では、野生の動物たちが田畑の野菜などを食い荒らすことから、田畑をまもる

農山村における住民生活の構造と福祉的課題とに関する一考察（高木健志）

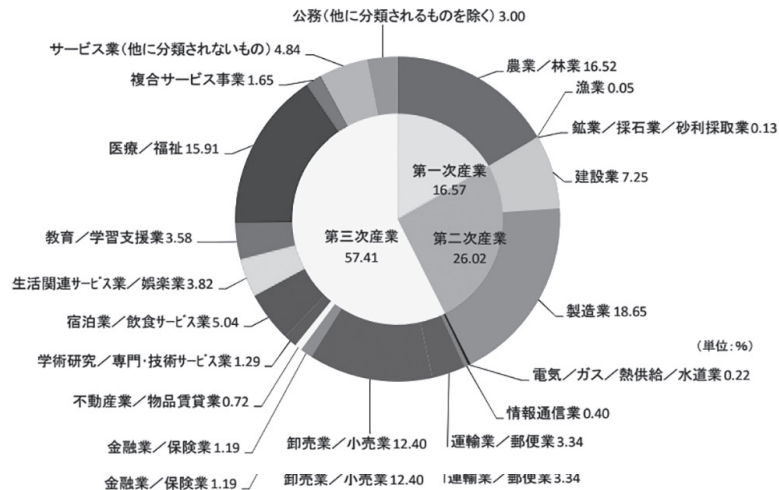
表5 産業（大分類）別15歳以上就業者構成比 単位：%

大分類	山鹿市	山鹿地区	鹿北地区	菊鹿地区	鹿本地区	鹿央地区
第1次産業（A～B）	16.57	10.73	27.58	27.15	14.83	30.64
A 農業、林業	16.52	10.70	27.58	26.96	14.80	30.64
B 漁業	0.05	0.04	-	0.19	0.03	-
第2次産業（C～E）	26.02	26.11	26.50	25.83	28.53	21.04
C 鉱業、採石業、砂利採取業	0.13	0.14	0.23	0.06	0.03	0.26
D 建設業	7.25	7.01	9.10	8.44	7.18	5.46
E 製造業	18.65	18.96	17.17	17.33	21.32	15.32
第3次産業（F～S）	57.41	63.15	45.92	47.02	56.64	48.32
F 電気・ガス・熱供給・水道業	0.22	0.32	0.09	0.13	0.08	0.13
G 情報通信業	0.40	0.43	0.38	0.29	0.41	0.31
H 運輸業・郵便業	3.34	3.49	2.81	2.54	3.78	3.23
I 卸売業・小売業	12.40	13.61	10.41	8.37	14.04	9.43
J 金融業・保険業	1.19	1.51	0.61	0.52	0.97	1.09
K 不動産業・物品賃貸業	0.72	0.92	0.33	0.39	0.69	0.39
L 学術研究、専門・技術サービス業	1.29	1.55	0.80	0.97	1.10	0.92
M 宿泊業、飲食サービス業	5.04	6.25	4.17	3.70	3.32	3.19
N 生活関連サービス業、娯楽業	3.82	4.40	3.56	2.32	3.55	2.97
O 教育、学習支援業	3.58	4.19	1.59	2.67	3.94	2.36
P 医療、福祉	15.91	16.95	12.71	15.94	14.96	14.10
Q 複合サービス事業	1.65	1.58	2.91	1.80	1.28	1.35
R サービス業（他に分類されないもの）	4.84	4.80	3.38	4.73	5.45	5.54
S 公務（他に分類されるものを除く）	3.00	3.14	2.16	2.64	3.07	3.32

※「分類不能」は合計から除外して算出。

平成27年国勢調査

出典：熊本県山鹿市（2020：27）をもとに筆者引用



出典：熊本県山鹿市（2020：26）をもとに筆者引用

図1 産業（大分類）別15歳以上就業者構成比

ために、鉄製の柵で田畑を保護している（写真1, 2）。写真においても鉄製の柵が確認できよう。もはや、現代農山村の風景も、どうぶつたちとの共存というよりも、どうぶつたちを排除することで田畑をまもらざるをえない状況にある。これは、社会的包摂が叫ばれる現代社会のなかで、ひょっとしたら可視化された「社会的排除」のひとつの姿なのかもしれない。



写真1 現代農山村の風景1  
(熊本県山鹿市某所2020年1月筆者撮影)



写真2 現代農山村の風景2  
(熊本県山鹿市某所2020年1月筆者撮影)

## 2. 農山村の住民生活と課題

さて、前項にて、現代の農山村の特徴をあげるとするならば、田畑や山林の面積が大きく占めており、地理的には「農山村」といえるが、住民の生活の構造を従事する産業という観点から見た場合には「住民生活の都市化」がうかがえる。これは、従来は、農業が主たる産業であれば、住むところと働くところが同じ生活圏であり、したがって生活そのものも「集落」を基盤とした生活であった。しかし、山鹿市による既出の統計データによれば、地理的状況としては農山村といえるが、住民の就業状況からは、農業従事者よりも圧倒的に勤労者の数が多い。つまり働きに出る、という労働形態であったり、夫婦共働き、という都市型の生活様式が農山村住民の主たる生活形態になってきているのではなかと予測される。しかも、おそらくは、50歳代以下の世帯ではこのいわば都市型の労働・生活形態が主たるものとなっているのではないだろうかと考えた。

この現代農山村における「住民の生活様式の都市化」は、どのようなことをもたらすのであろうか。

当然、農山村の住民も、スマートフォンを所持する。そうすると、次に、「都市の生活と同じスピードで情報にアクセスすることが可能」になる。そうすると、景色はのどかな山々や田畑に囲まれた農山村が眼前に広がっていたとしても、農山村の住民にとってその景色に価値はほとんどなく、むしろ「都市の生活」と同じ程度の知識を持った生活が可能となる。筆者が、農山村を主たる現場として実践するケアマネージャーとやり取りした際に、筆者が田舎は住民の皆さんの雰囲気がいいですよ、と言ってしまった際に、「(情報へのアクセスのスピードが上がったことによって農山村の住民は)もはや何も知らない、ただのお人よしではない」と聞いた。もちろん、すべてのことを指すわけではないが、生活様式の都市化とそれともなう現



代農山村の変化とがうかがえるフレーズとして筆者のところに強く残っている。藤松の「農村部でのコミュニティ崩壊、都市部でのコミュニティ未確立」<sup>(3)</sup>という指摘は筆者が見て理解した現代農山村の現状をとらえている。しかも、藤松の指摘のそれに重ねて岡崎のいう「生活の社会化」<sup>(4)</sup>が劇的に進展しているのが、現代農山村であるといえよう。つまり、急速な「商品化としての社会化」＝市場化<sup>(5)</sup>によって、「コミュニティが崩壊」<sup>(6)</sup>していつているのではないだろうか。

どうやら現代の農山村の実態は、イメージとは違ってくるようである。コミュニティが脆弱化してきている現代農山村の方向を考えていくにあたっては高野の指摘が有用である。高野は「社会的統合を関係性の強化として捉えるだけでは、コミュニティの抱える問題解決につながることは単順にはいえない。社会的統合がどのような意図で強められるのか、そこからこぼれ落ちているのは、どのような人々なのかを、考えておく必要がある」としている<sup>(7)</sup>。

では、現代の集落の状況を把握するためにはどのような方法があるのであろうか。

金田は、コミュニティワーカーへの調査から、「課題を抱える当事者が、共通の価値や目的のために、持てる力を結集して立ち上がり、社会変化を起こしていく」ことを指摘している<sup>(8)</sup>。そのうえで、具体的な方法として「コミュニティオーガナイズング」を挙げている<sup>(9)</sup>。地域住民が主体となった地域の実情と課題を明らかにする方法としては、ほかにも「T型集落点検」という手法もある<sup>(10)</sup>。

また、農山村で生まれ育ったもののうち、進学などを契機に他地域へ転出して、その転出先で世帯を構える、いわば他出子も多くいるのではないだろうか。今回の統計資料からはそこまでは読み取ることはできないため別稿にゆずるが、地域移住、いわゆる「定年後にふるさとにUターンする」などの人口の還流についても注視する必要がある。松本は、「高齢化が進むなかでIターン者に期待する声は大きくなるばかりだが、Iターン者の移住動機や地域への期待が理解されなければ、受け入れが困難になるばかりか、受け入れた後に移住者と地域住民の双方に失望が生じる原因ともなりえる」<sup>(11)</sup>と指摘している。

### 3. 農山村の新しい状況下における生活と福祉的支援について

新しい状況下とは、とりもなおさずコロナ禍の影響によって、大きく変化せざるを得ない農山村の生活と福祉的支援とを指す。

コロナ禍で、緊急事態宣言の発出、外出自粛、3密やソーシャルディスタンスといったように、大きな生活様式の変化が求められた。なかでも、リモートワーク・在宅勤務など「おうちじかん」といわれる過ごし方への生活様式の変化の影響は多きものであった。

在宅で過ごす時間が増えたことで、家族のきずなが強まったという一方、自宅内の児童虐待をはじめとした子どもたちへの支援策の必要性なども問題視されている<sup>(12)</sup>。たとえ

ば、児童虐待などの事件も都市部のニュースが取り上げられ、かつ全国放送されることで、児童虐待が、あたかも「都市」の問題であるかのような錯覚を起こす。これに、田舎の人間は温かい、といった言説が重なれば、都市は冷たく田舎は温かい、という単純な構造でとらえられかねない。しかし、筆者が見てきた田舎でも、虐待やDV（暴力）の問題はあったし、いい人ばかりでもなかった。何が言いたいのかというと、田舎の実態のことも、ちゃんと見つめるべきだ、ということである。増井は「暴力から離脱するための物理的な線と関係の線を引く」<sup>(13)</sup>ことの重要性を指摘している。ただでさえ、住民の数が減少している現代農山村において、さらに、住まいは農山村にありながら、働き方は会社勤めという住民は在宅勤務や家庭内で過ごさざるを得ないという閉鎖的な生活空間のなかで、「線を引く」ということがコロナ禍における暴力に関する問題から身を守る方法の一つであることを農山村の住民にも啓発していく必要があるだろう。

では、農業従事者であれば、生活に課題はないのだろうか。農業は、家屋内だけで完結できる在宅ワークが困難な職業の一つである。田畑へ出ていかねばならない。そして、出荷した作物が、スーパーマーケットに並び、市民のおうち時間を支えていくこととなる。コロナ禍の影響で変化する人々の暮らしとは関係なく、自然は移ろう。春になれば花が咲き、秋になれば実をつける。鶏は成長し、卵を産む。母牛は、毎日乳を搾らなければ死んでしまう。農業従事者に、おうち時間という様式が、あてはまらない。世のなかの「外に出てはならない」という空気と闘いながら作物を作り続けているのである。

もう少し、農業従事者の生活の話から、農山村の福祉的課題に関する側面を高木（2020）<sup>(14)</sup>をふまえて考えてみよう。イメージをわかりやすく共有していくための例として、農業が中心の家庭で、高齢者の介護が加わった場合を仮定しながら進めるとしよう。

農業は、朝から晩まで、田畑での仕事となる。そうなると、介護を要する家族が同居していた場合には、日中、介護を要する家族を一人にはできないことから、その介護を要する家族が過ごす場を探さねばなくなる。そうすると、農山村にある高齢者介護施設は、多くの利用者が入・通所することとなる。

他方、農山村部の高齢者施設で介護に従事する人々は、感染に細心の注意を払いながら、仕事をしなければならない。プライベートの時間も、感染予防の観点から、在宅で過ごさざるを得ない。農山村の高齢者介護施設でクラスター感染が発生したと仮定するならば、対応できる医療機関には限りがあることも考慮しなければならない。そうすると、農山村の高齢者介護施設で介護に従事する人々の疲弊を食い止めなければならない。現在、政府は経済政策の一つとして「Go To トラベル」、「Go To Eat」といった政策を展開している（2020年11月6日現在）。感染を避けなければならない農山村の介護従事者は「同じく納税者」ではあるのにもかかわらずこの政策の恩恵にあずかることはできない可能性が高いであろう。それでいいのだろうか。

介護従事者の疲弊について、もう少し考えてみよう。労働時間と生活時間について述べてい

る岡崎は「家族とのコミュニケーション、趣味、文化にふれる、親交のため、友人との交流、恋愛、社会活動の参加、職場や会社の価値観に縛られないで自由な発想やし好に浸ったりすることができる時間が自由時間」<sup>(15)</sup>としている。岡崎のいうこの「自由時間」がことごとく新型コロナウイルス禍で奪われ続けている生活を強いられているのが介護従事者の方々なのではないだろうか。「人間の発達にとっては必要不可欠な時間であり」<sup>(16)</sup>、「労働時間が長くなり労働密度が強化されるとそれだけ生活時間が減少し疲労を蓄積させ、肉体的にも精神的にも、精神的にも労働に従属する度合いが高まる」からである<sup>(17)</sup>。

## おわりに

本稿では、現代の農山村の生活の構造、そこから考える福祉的課題について検討してきた。なかでも、コロナ禍という想像もしていなかった状況の変化が、農山村の住民生活、なかでも福祉的課題にどう影響していくのか、多くの課題が見当たった。

今後も、引き続き、現代農山村に注目しながら研究を進めていきたい。

### 〔注〕

- (1) 藤松素子（2006）「現代社会のコミュニティと地域福祉」藤松素子編著『現代地域福祉論』佛教大学, 6.
- (2) 熊本県山鹿市（2020）『熊本県山鹿市 統計 令和元年版』（<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/www/contents/1545007312822/simple/30zentai.pdf>, 2020.11.10）.
- (3) 藤松素子（2006）「現代社会のコミュニティと地域福祉」藤松素子編著『現代地域福祉論』佛教大学, 6.
- (4) 岡崎祐司（2014）「第4章 現代の労働と生活」『現代福祉社会論』, 佛教大学, 114-115.
- (5) 岡崎祐司（2014）「第4章 現代の労働と生活」『現代福祉社会論』, 佛教大学, 78-79.
- (6) 藤松素子（2006）「現代社会のコミュニティと地域福祉」藤松素子編著『現代地域福祉論』佛教大学, 3-64.
- (7) 松本貴文（2020）「第4章 なぜ都市への人口集中が続くのか」三隅一人・高野和良編著『ジレンマの社会学』ミネルヴァ出版, 49-66.
- (8) 金田喜弘（2020）「第14章 共生社会に求められる地域に根差したソーシャルワーカー」上野谷加代子編著『共生社会創造におけるソーシャルワークの役割—地域福祉実践の挑戦—』ミネルヴァ書房, 246.
- (9) 金田喜弘（2020）「第14章 共生社会に求められる地域に根差したソーシャルワーカー」上野谷加代子編著『共生社会創造におけるソーシャルワークの役割—地域福祉実践の挑戦—』ミネルヴァ書房, 246.
- (10) 松本貴文（2015）「第3章 新しい知己社会調査の可能性」『暮らしの視点からの地方再生—地域と生活の社会学—』九州大学出版, 90
- (11) 高野和良（2020）「第1章 つながりのジレンマ」三隅一人・高野和良編著『ジレンマの社会学』ミネルヴァ書房, 3-16.
- (12) 朝日新聞（2020）「休校中のSOS, 受け止めたい 虐待や生活苦の家庭の子ども, 支援」2020年5月18日付朝刊, 20.
- (13) 増井香名子（2020）「おわりに—調査を実施して—」国立大学法人奈良教育大学学校教育講座岩本華



子研究室『調査報告書DV被害調査からみる被害者と子どもの経験—DV被害者支援の実態に関する調査より—』, 32.

- (14) 高木健志 (2020) 「現代の農山村における生活と福祉的課題と農村ソーシャルワーク」『農業と園芸』95 (9), 767-773.
- (15) 岡崎祐司 (2014) 「第4章 現代の労働と生活」『現代福祉社会論』, 佛教大学, 79.
- (16) 岡崎祐司 (2014) 「第4章 現代の労働と生活」『現代福祉社会論』, 佛教大学, 79.
- (17) 岡崎祐司 (2014) 「第4章 現代の労働と生活」『現代福祉社会論』, 佛教大学, 79.

#### 謝辞

農山村における福祉的課題について貴重なご教示をいただきました熊本県山鹿市の介護支援専門員の方に深謝します。また本研究は科学研究費助成事業（科研費18K02157：研究代表者高木健志）の助成を受けたものです。

(たかき たけし 社会福祉学科)

2020年11月13日受理